

# 整党と精神汚染一掃

## 大詰め迎えた中国の内政改革

### 異常なキャンペーン

懸案の胡耀邦・中国共産党総書記一行来日  
 が実現した。初めて西側諸国を訪れた生粋の社会主義者・共産主義者である胡耀邦氏の目に、わが国の今日の繁栄がどう映るのか、どのような資本主義観が形成されるか、従来の社会主義像にどんな影響を与えるのか、大いに注目されることである。

それにしても、中国共産党の最高指導者が初めて資本主義国を訪問するというのにこのところ『人民日報』は連日、「ブルジョア思想による精神汚染」一掃のキャンペーンを張り、中国要人も口をそろえて「精神汚染」排除の必要を説きはじめているのは、きわめて異常な光景だといえよう。

そのうえ、社会主義社会の矛盾や弊害の

指摘を積極的に受け容れてきた『人民日報』

の胡績偉社長や王若水・副総編集長が更迭され、中国文芸界の重鎮、周揚・中国文学芸術界連合会主席までも「社会主義下の疎外(異化)」問題を誤って提起したとして、「理論界、文芸界でのおびただしい精神汚染現象にたいして理解を欠いていたうえに、研究も足りず、精神汚染による深刻な結果についてはなおさら評価が足りなかった」と「自己批判」に追いこまれている(『人民日報』一九八三年十一月六日)。

そうしたなかで、この夏以来、中国各地では犯罪者の大量摘発と公開見せしめ処刑が実行されており、この二、三カ月間にすでに一万名以上が死刑を執行されたとの情報もある。いかに腐敗墮落分子とはいえ、それらの犯罪者も大部分は、厳しい中国の政治社会の脱落者であり、毛沢東政治の犠

牲者でもあるので、なぜこのような処刑が必要なのか、理解に苦しむところである。

以上のような諸事実は、文革初期の緊張を想起させるが、このような厳しい社会的雰囲気、この冬からいよいよ本格的に開幕する整党の序曲であることは疑いない。

### 中央から地方、末端へ

一九七八年十二月の中国共産党三中全会(第十一期)以来、非毛沢東化の政治戦略を着々とすすめてきた鄧小平、胡耀邦指導部は、昨年九月の中国共産党第十二回大会で党中央の権力をほぼ掌握し、いよいよ中国社会の地方、末端にいたる非毛沢東化を実現するために、今回、四千万中国共産党員の総点検を断行するのである。

当初は、整風運動ないしは整党運動として位置づけられていた今回のキャンペーンが、たんなる「整党」と規定されたことは、このキャンペーンが「中央から地方へ、地方から中央へ」「上から下へ、下から上へ」という往復循環の大衆運動としてではなく「中央から末端組織まで、上から下へ、何

回かに分けて進められる」(『人民日报』一九八三年十月十四日付社説「整党は現代化の偉大な勝利をかちとるための重要な段取りである」)一方通行の「肅清」にはかならないことを物語っている。

整党は「党内にはまだ多くの重大な問題があり、十年の内乱の害毒は完全に一掃されていぬ」(同前)からこそ緊急に必要だというのだが、この点を去る十月十一日に中国共産党二中全会(第十二期)が採択した「中国共産党中央委員会の整党についての決定」は、「党内には『三種類の者』、すなわち、林彪・江青反革命集団に追隨して、造反によつてのしあがつた者、派閥意識のひどい者、毆打・破壊・強奪分子がまだ残っている」として、さらに具体的に次のように述べている。

「『三種類の者』のなかで、造反によつてのしあがつた者とは、『文化大革命』期に、林彪・江青一味と密着してグループ、派閥をつくり、造反によつて奪権し、出世し、悪事を働いた情状のゆゆしい者を指す。派閥意識のひどい者とは、『文化大革命』期に、林彪・江青反革命

集団の反動思想の宣伝に血道をあげ、グループ、派閥をつくつて悪事を働き、『四人組』粉砕以後も陰に陽に派閥活動をつづけている者を指す。毆打・破壊・強奪分子とは、『文化大革命』期に、幹部、大衆に無実の罪を着せて迫害し、拷問にかけて自供を迫り、人身に重大な損害を与えた情状のゆゆしい者、党・政府機関にのりこんで人事資料・機密書類を奪い、公私を問わず財物を破壊した主要分子と舞台裏でそれを画策した者、武闘を画策し組織し指揮して重大な結果を招いた者を指す。この『三種類の者』に該当するかどうかを決める根拠は、党と人民に危害をおよぼした事実であつて、『文化大革命』中の肩書や、どの組織に参加したかということではない(傍点、引用者)。

### “左”と“右”を同時にたたく

右の決議の文章自身、今回の整党がいかに深刻な意味をもつものであるか、なぜ整党が「鄧小平の最後の賭け」(本誌一九八

三年九月六日号の拙稿)であるかを示唆しているといえよう。

このような整党は、最後的には黨員の登録、延期登録、不登録、除名といった組織上の措置を伴つて、まず第一期としてはこの冬から中央レベル、省・直轄市・自治区レベル、人民解放軍指導機関で実行され、八四年冬からの第二期には地方、末端レベルで実行されるといふ。

こうして整党では旧文革派つまり“左”をたたき、精神汚染一掃キャンペーンでは“右”をたたくのは矛盾だと一見思われるが、実は、いずれも鄧小平「胡耀邦指導部から発せられたものであり、むしろ“左”をたたくとともに“右”から自己を防衛するためにも、「ブルジョア的な精神汚染」一掃という、より正統的な錦の御旗が必要なのではなからうか。

いずれにせよ、来日した胡耀邦総書記には、党中央整党工作委員会主任としての重大な任務が、帰国早々に待ち受けているのだ。

《東京外国語大学教授 中嶋嶺雄》

## 二十一世紀の協力関係を探る

### 日中友好を確認した胡耀邦来日

胡耀邦中国共産党総書記は十一月二十三日から一週間にわたり日本を公式訪問、三十日に帰国した。中曽根首相ら日本側との会談などを通じ、日中友好関係の新たな飛躍を内外に強く印象づけた今回の訪日は、中国側にとっても大きな成功だったといえよう。

胡総書記は二十四日午前、中曽根首相との日中首脳会談に臨み、両国が体制の違いを超えて友好関係を発展させること



胡耀邦と中曽根首相の第一回会談に  
入る胡耀邦と中曽根首相

がアジアや世界の平和と繁栄にとって重要、との認識で一致し、二十一世紀に向けた堅固な協力関係を築く方策を探るため、日米賢人会議の日中版とも言える「日中友好二十一世紀委員会」（仮称）を設けることで合意した。

会議は冒頭の五十分間、両首脳に安倍、吳学謙両外相と通訳だけを加えて進められ、席上、中曽根首相は中国の内外政策に「若干の安心できない点がある」として、

①中国の対外開放政策は永続するか、②経済建設計画は安定しているか——とたじた。これに対し、胡総書記は「そうした懸念は心配ない」と明言。続く全体会議でも、中国で展開中の整党運動や精神汚染の除去活動に触れて「これらは、われわれが明確にしている海外開放政策をより建設的に発展させるためにも欠かせないので進めているものだ」と強調した。

一方、胡総書記は四者会談の席上、「日本の一部に軍国主義復活を望んでいる者がいる。防止の努力を望みたい」と注文、さらに日米関係に言及して「米国が日本

を前面に立てて、うしろで見ているという姿になることは好ましくないと指摘した。首相はこれに対して「日本が軍国主義になることはないし、米国の前面に立つて道具になることもない」と述べ、中国側の懸念を払しょく。さらに「これまでの平和友好、平等互惠、長期安定の日中三原則に相互信頼を加えて四原則としたい」と提案した。

日中両国が相互に最も関心ある問題について、両首脳が極めて率直に対話を試みた点が注目される。中国の「近代化」建設に対する日本の協力を軸とした「日中新時代」の幕開けに当たり、「前途に不安がないかどうかを最終確認した」（外務省筋）ものといえよう。

首脳会談を受けて翌二十五日に行われた外相会談では、当面の国際情勢についても意見が交換され、席上、吳外相は中ソ関係正常化の「三条件」に「極東配備の中距離核ミサイルSS20の大幅削減が含まれている」と明言、SS20の大幅削減が関係正常化の条件であることを明らかにした。吳外相はまた、欧州中距離核戦力（INF）削減交渉にも触れ、「中国は関心をもっている。当面の問題は、両大国が誠意を示し、話し合いを通じて合意に達するよう訴えるべきだ」と述べ、交渉継続を求めていく点で両国の見解が

一致した。さらに朝鮮半島情勢について吳外相は「半島の平和と安定は望ましく、このため日中ともに努力していかう」と発言、中国が朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）に対し自制を働きかけていくことを示唆した。

これらはいずれも大筋において日本側を満足させるものであり、「日中間にはもはや懸案はない」（外務省筋）といえるほど、両国の関係は緊密化したものとなっている。

胡総書記は二十五日の国会演説で、中国の国内態勢が安定化の方向に向かっていくことを指摘したうえで、「対外開放政策は不変である」と強調したが、これなども日中関係の将来に中国が自信をもっている表れといえよう。

とはいえ、中国側もクギを刺すことを忘れなかった。胡総書記は日米協調を支持する一方、米中関係の障害要因である台湾問題の重要性を改めて強調。二十六日の記者会見では、米上院の台湾の将来についての決議採択を「不愉快な出来事」として挙げ、趙紫陽首相の一月訪米をとりやめる可能性があることを示唆した。こうした中国の原則重視の姿勢からみて、日中関係についても、新時代における友好を実績で証明していく姿勢が求められるよう。

（妻）